宇宙核戦争と日本の針路

藤岡 惇（立命館大学名誉教授）

藤岡です。「宇宙核戦争と日本の針路」というテーマで、本日は宇宙作戦隊に焦点をあててお話させていただきたいと思います。

宇宙作戦隊が２０２０年５月、日本の航空自衛隊内に発足しました。アメリカの宇宙軍は、２０１９年１２月に発足しています。アメリカの５つの軍種、陸、海、空、海兵隊、沿岸警備隊に続く第６番目の軍種として設立されました。まだ人員は１万６０００人ぐらいです。今後成長していくでしょう。同格のものが自衛隊の宇宙作戦隊ということになります。

自己紹介をします。３５年前の「研究」に舞い戻った「アメリカ」研究者であります。『ＳＤＩスターウォーズの経済学』（ミネルヴァ書房　１９８９年）、こういうものを昔

訳したり、書いたりしていました（1）。それと同時に「宇宙に平和を！ネット」（正確には「兵器と核エネルギーの宇宙配備反対！地球ネット」）の理事を１２年間やっています。私の議論をもっと深く知りたい人はホームページ「平和なエコエコノミーへの転換を考えるサイト」を見ていただきますと、私の書いたもので公開できるものは無料でいくらでも読んでいただけます。関心ある方は読んでください。

Ⅰ　最大の危機とチャンスの混在

（１）危機・・

最大の危機とチャンスが混在しているのが現在であります。

最大の危機と今いうのは「核の時代」に、特に日本では福島第一原発がこの状態。

ここを軍事攻撃されたら・・。核爆発が起こるのと同じことが簡単に起こってしまう。いわば、戦争ができない体になってしまった国が日本であります。福島原発のああいう状態を抱え込んでいるというのが、危機状態にあるということです。

・世界終末時計は・・１分４０秒前

危機を表しているものに、世界終末時計（2）があります。毎年１月の中旬くらいに発表さ

れるのですが、発表初年度の１９４７年は核戦争勃発の７分前でしたが、冷戦ピークの１９５７年は２分前。ソ連が解体した１９９１年は１７分前。それから縮まって、２０１７年、２０１８年には２分前になっていたのが、２０２０年１月、１分４０秒前。だから、広島、長崎以来,現在が一番核戦争の起こりやすい状態に来ています。

・核戦争のリアルな認識・・・

しかし、多くの人は核戦争が起こるというリアルな認識を持つことができていません。なぜかと言いますと、核戦争のイメージがまだ広島、長崎のイメージに縛られているからです。たった一発の爆弾で何万人もの人が死んでしまうようなイメージです。それが問題です。「１分４０秒前」の現代の核戦争はどのように始まるのか、その始まり方をもっとリアルに想像することが必要です。平和学はそのためにあると思っています。科学というのはだいたいが好奇心から起こるのでありますが、しかし、唯一、平和学というのは、恐怖心から起こるものです。そういう意味で、戦争、特に核戦争を考えるためには正当な恐怖心をもつことも必要です。

私はこれから核戦争が起こるとすれば、なんの防御も法的規制もない「無法地帯」である宇宙空間における戦争から始まる。宇宙衛星への地上からの攻撃、衛星同士の交戦から宇宙での核爆発に至る――このような流れの中で始まる可能性が高いと思っています。

宇宙はどこから始まるかというと、人工衛星が周回できる地上１００キロ以上の空間です。宇宙空間における核爆発からはじまる可能性が非常に高い。なぜならそこで起きても誰も核戦争だとはすぐには気づかないからです。人は誰も死なない。最初は宇宙にある機械システムだけが麻痺する。機械というのは主に宇宙衛星です。宇宙衛星がダウンする。それだけですから核による報復がしにくい。これは原発の爆発とよく似ています。直ちに人は死なず、じわっとくる。核戦争はそういう始まり方をするでしょう。

宇宙の核爆発は、まず宇宙資産を麻痺させます。主に、上空１００キロ以上を飛ぶ人工衛星ですが、それから、地球の引力圏の外に向かう宇宙船（人工衛星）。上空２０～１００キロを飛ぶ宇宙飛行機のようなものです。そして、宇宙での指揮系統を麻痺させます。つまり、戦争の指揮系統が麻痺します。さらに、宇宙の中の特に低層の１００キロから１０００キロのところで電磁パルス(3)を大量に発生させるような核爆発を起こせば、直下の都市機能が麻痺してしまうのです。原発は制御不能になって暴走し、爆発してしまう。

・核ミサイルを撃ち合うのは敷居が高い・・・

原発が暴走してしまう。爆発してしまう。こういうような形での核戦争の始まり方になる可能性が高い。それはやりやすいからですよ。核ミサイルを撃ち合うというのは、非常に敷居が高いですね。なかなかそこまではできない。ですから、まずは人は死なないし、地上での建物も財産も無傷のままという形で始まっていくのではないだろうかと考えています。

（２）朝鮮戦争を終結させ、北東アジアを「平和の地」に変える好機

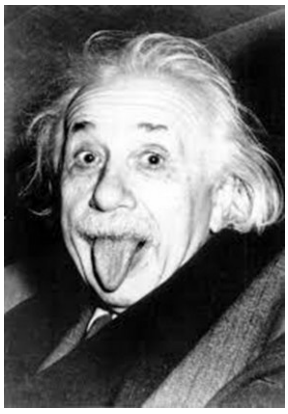
他面、好機というのは、朝鮮戦争を終結させるチャンスが今、来ている。今年（２０２０年）は朝鮮戦争がはじまって７０年ですが、いまだに終わってない。史上最長の戦争のひとつになりました。朝鮮戦争を終結させることは、アジアの地を平和にする好機で、それがはじまっています。トランプさんも一時はこれに同調した。次の大統領がどうなるかということにもなりますが、朝鮮戦争終結に向かうプロセスが復活する可能性もあります。

それともうひとつは新型コロナのパンデ

ミックと、地球規模での気候変動の危機。それからすると、核戦争あるいは宇宙戦争を今、起こす時だろうかという、批判的な世論がわき起こる。ミリタリーなセキュリティーでなく、ヒューマンセキュリティー。あるいは、コモンセキュリティーですね。敵をつくらない、「共同の安全保障」というような考え方が広がってくる環境にあると思います。

Ⅱ　「核の時代」とは？

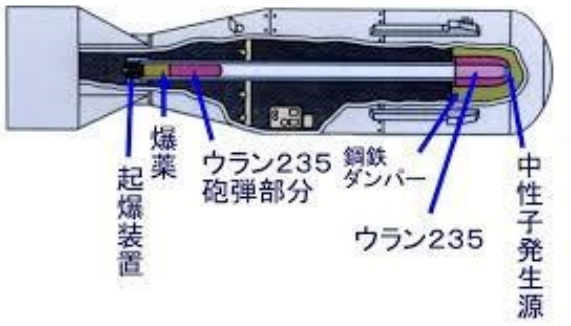
そういう中で核の時代とは何なのか。アインシュタインは言いました。



「核の時代はすべてを変えてしまったのだが、人々の考え方は、昔のままだ。ここに最大の危険がある」

この事例をいろいろ述べていきたいと思います。核の時代というのをひっぱってきたのは核兵器と原子力発電です。

（１）第一世代の核兵器　広島型原爆とは・・



核兵器第一世代というのは、広島型原爆でありました。図体だけが大きい「おもちゃ」のような存在でした。なぜそうかというと、広島型のウラニウム原爆というのは、核分裂は１％か２％。９８％のウラン物質は飛び散っただけなんです。核分裂に至ったウラン２３５は極めて劣悪。長崎型のプルトニウム原爆の分裂効果はもっと高いが１０％程度。

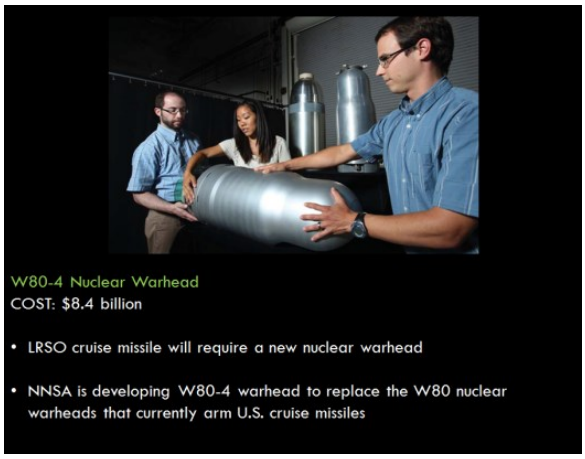
（２）第二世代は「水爆」

核兵器の第二世代は水爆でした。図体は大きく、無限の爆発力があります。原爆を引き金にして、核融合させる。重水素、三重水素（トリチウム）そういった軽い元素の同位体をひっつける。そのことによって爆発させる。原爆による核融合というのが水爆なんですね。

（３）第三世代ーブースト型原爆（核弾頭）核融合作用で１００％の核分裂を実現し、小型化を達成

第二世代の変形が第三世代です。核融合物質も一部を使うのだけれど、爆発力は核分裂作用が中心のものでブースト型原爆と言います。これは非常に小さくなりますから、核

弾頭という形になります。典型的なものというのは、このぐらいの大きさになる。これをひとつのミサイルの先頭に６つとか８つとかを積みます。この一つひとつを核弾頭と言います。人体サイズまで小さくなる。これが一番小さい。



（４）北朝鮮が２０１７年公開映像

第三世代、ブースト型原爆というものを北朝鮮がついに開発したのだというのを映像で明らかにしたのが２年前でした。金正恩さんが喜んで見ている。

写真の左端に台座がある。本体とチューブでつながっている。ここに核融合物質、トリチウムとか、重水素とか、そういう非常に軽いガスを入れておく。爆発する直前になってくると、本体のプルトニウムの真ん中のところの穴に、核融合のトリチウムガスを注入する。すると、核分裂が始まっても放っておくと１割か２割ぐらいしか核分裂してくれないものが、核融合のエネルギーでブーストできる。ブーストするというのは促進するという意味で、ここへ核融合ガスを核分裂の直前に封入すると、１００％の核分裂ができる。さらに上の部分に核融合の物質を置いておくんですね。核融合の物質というのは１００％どこでも簡単に融合できるので、下部の核分裂のパワーで核融合爆発をしますからね。核分裂、核融合。その力によってふたたび、核融合。周りは核分裂物質を含んだ重い金属で固めていますから、そこで再び核分裂が起こる。だいたい４つぐらいの核反応を起こす。これがブースト型原爆の核反応です。

これは化学反応でなく、核反応ですから、スピードが早いんです。ダイナマイトのような化学反応は大体１０００分の１秒ぐらいで終わってしまう。それに対して、核反応は１００万分の１秒ぐらいで終わってしまう。５段階の核反応があったとしても１０万分の１秒で終わってしまう。

だから第三世代の核ミサイルを迎撃する。途中で撃ち落とすというのがいかに難しいか。迎撃ミサイルが近づいてきた時にそれを察知して、先に核自爆する装置をつけておけばいい。近接信管っていうんですけれど、第二次世界大戦のときの高射砲と同じようなもので、敵の飛行機に当たらなくても１０メートルとか、２０メートルとか近づいたら、それで反応して爆発してくれる。

だから、仮に北朝鮮の核弾頭ミサイルが飛んできたとします。そしたら日本のイージス艦から迎撃ミサイルＳＭ３が発射される。しかし、北朝鮮はすでに２年前に第３世代型の核ミサイルを開発したことを映像で公開しています。ＳＭ３が近づいても察知して、北の核弾頭の核反応は１０万分の１秒で終わってしまいますから、ですから日本のSM３が１メートルぐらいまで近づいてもいいんです。そこで核自爆がはじまったら核反応―核爆発は終わってしまう。迎撃すべき相手は「核の妖怪」へと姿を変化させて逆襲に転じることでしょう。核自爆が起こる場所は、秋田県の秋田市の上空１０キロ、あるいは東京

都の上空１００キロとかで、このあたりのことを陸上イージスの導入を決めた人が全く何も考えていなかった。日本の防衛省担当者にも言い分はあるでしょう。米ソ冷戦の終焉以来、米国のミサイル防衛は、非核ミサイルの撃墜、阻止が主流であった。したがって日本のミサイル防衛も、非核の通常ミサイルの阻止、撃墜が暗黙の前提であった。しかし、情勢が変わりました。米ソ冷戦の終焉後も、日本の国民はアメリカの軍産複合体にばかされて、核ミサイルを撃墜する目的をかかげて時代遅れの非核ミサイル仕様のミサイルを買わされた。１０００億とか、２０００億円ぐらいのお金がスーッと消えてしまった。こういう話であります。

（５）開発途上の第四世代核兵器の諸タイプ

①核爆発利用型

・超小型核兵器

現代は第四世代の核兵器も作っています。核爆発を利用するようなものとしては、超小型の核兵器です。場合によってはキャリーバッグで運ぶことができます。だからミサイルに積まずにキャリーバッグで核兵器を持って行って、東京タワーの上に置いておく。そういうようなことはいくらでもできる。大枚をはたいて天空の防衛に壁を築いても何の意味もない。こういう時代になってきたということです。

・宇宙戦争用の電磁パルス強化型の核弾頭

もう一つは、宇宙戦争用の電磁パルス強化型の核弾頭です。爆発した時に中性子線ではなく、もっと別の電磁波が大量に出るものです。核融合物質の爆発させ方によって何を大量に出せるようにするか、かげんできるわけです。

日本の上空で核爆発が起こって、電磁パルスがたくさん発生すると何が起こるか？人や建物は破壊されません。最も打撃を受けるのは電力網です。電線の系統そのもの。あるいはコンピューター。こういうものが全部ブラックアウト（全系崩壊）してしまう。ひと昔前は、「核の冬」だと言いました。「核の冬」でなくて、起こるのは「核の闇」。ニュークリア・ブラックアウト。要するに電力システムそのものがダウンしてしまう。一旦ダウンしてしまうと、これは場合によっては数カ月復旧できない。だから原子力発電所の電力システムもダウンし原子炉の爆発を招きかねない。そのものを誘爆しますね。経済システムそのものがダウンしかねません。だから我々が想像できないようなこと、「thinking unthinkable］という警句がありますが、考えられないことを考えておく時代となりました。

②超小型原子炉（ないし原子電池）利用型

・原子炉推進型の超高速ミサイル（ロシア）

もうひとつのタイプは核兵器とは言えないかもしれませんが、超小型の原子炉ないし原子電池を利用するような形のものです。ロシアが好きなのは超小型の原子炉です。それを推進力に使って超高速ミサイルを作る。その実験を北極海でやって、爆発事故が起こってかなりの人が死にました。あるいは、核推進の魚雷もロシアは作っています。

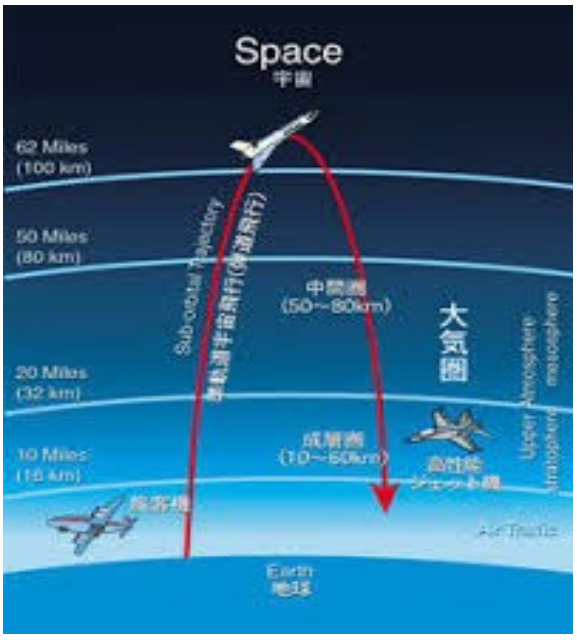
・原子炉を電源とする電磁波発射衛星や宇宙飛行体（米国）

アメリカが得意なのは、電磁波を発射するような衛星です。しかし、かなり大きなエネ

ルギーが必要なんです。原子電池ぐらいではだめなので、超小型の原子炉を電源として宇宙衛星やもっと低空を飛ぶ宇宙飛行体に積むわけです。これを用いて強力な電磁波を発生させる。ビーム光線です（4）。なぜそれが必要かというと、敵の核ミサイルを敵のうちあげ基地のサイトの中で、あるいは打ち上げ直後のブースト段階で攻撃するためです。打ち上げは最初ゆっくりとしたスピードです。大体、上空１キロ、１０キロまではゆっくり上がる。その段階であれば捕捉・撃墜は難しくない。だから、陸上イージスができなくなってきた場合には、最後の手段は敵のミサイルを処分するために、ミサイル基地の中、あるいは発射された直後の数分間の間にそれを攻撃する。そうするためには目標の上空１０～１００キロのところに宇宙飛行体や宇宙空域に宇宙衛星を持ってきておいて、そこから光の速さで、光線兵器、電磁波兵器で攻撃するというわけです。

Ⅲ「宇宙（核）戦争」とは？

（１）宇宙とは



宇宙戦争。宇宙とはどこから始まるのか。大体言われているのは、人工衛星が飛べるギリギリの低いところ、１００キロから上を宇宙と言っています。大気圏というのは１００キロから下。大気圏の中でも対流圏という雲ができて空気が動いているのが地上から１万５０００メートル。１５キロまで。ここから上が成層圏。これまでの宇宙軍事化が進んでいたのは、１００キロから上のところですね。この間、大気圏の上層、上空１５キロから１００キロまでのところは、ほとんど軍事目的には使ってなかったんですよ。オゾン層が広がっているところです。宇宙衛星が衛星軌道としては飛べない空域でもあります。動力をもって、宇宙飛行機、あるいは宇宙飛行体と呼ばれている物体をアメリカもロシアも中国も開発して、そこを今使おうとしています。

（２）飛行体による区別

飛行体による区別で言いますと、一番上空を飛ぶというのは、人工惑星。宇宙船です。つまり、地球の引力より、むしろ太陽の引力に引っ張られる空域にまで上昇する。そうすると人工的な惑星になるんです。太陽の周りを回る小惑星、人工の小惑星です。

地球の引力に引っ張られる方が強く、地球の周りを回っているのを人工衛星と言います。宇宙飛行体というのはそこから下空域を飛ぶ。

ミサイルは宇宙飛行体の一種でもあるんですけれども、ミサイルとロケット砲の何が違うかといいますと、基本的には誘導できるかどうかです。ミサイルというのは誘導できます。その中で弾道ミサイルというのは、打ち出した後は慣性の力で飛び、弾道は放物線を描きます。これに対して巡航ミサイルは慣性力ではなく、自力を用いて低いところを飛びます。ところが極超音速でかつ低いところを、グライダーのように飛ぶという技術革命を、アメリカよりもむしろ中国にも銭霖林というロケット学者がいまして、彼らがここ数

年の間に作ったんです。これがＨＧＶ（極超音速滑空体）革命です。

・アメリカはＨＧＶ革命に負けた

アメリカは結局このＨＧＶの開発に遅れてしまったのです。ロシアや中国の方が先に進んでいるんです。ロシア、中国の先行をどうして米国は許してしまったか。ソ連崩壊後の３０年間、アメリカの敵はせいぜいサダムフセイン、イラク、イラン、あるいはフーシー派(5)のような、中東で時々ロケット砲(6)を打ち出すゲリラ、テロ勢力でした。だからイスラエルのアイアンドームのレベル、つまりロケット砲を迎撃する対空防衛を、この間米国は想定してミサイル防衛にとりくんでやってきたんです。それがここ数年ぐらい前から、突然、ロシア、中国、北朝鮮など強大な科学力を持ったミサイル大国との闘いをトランプ政権は再び打ち出した。しかし、それを１０年、２０年前の迎撃ミサイルのような技術で核ミサイル防衛もできるのだとして防衛省に売り込んだ。まがいものを売り込んだわけです。結局、核ミサイル防衛、しかもＨＧＶという槍を用いた核ミサイルには太刀打ちできないということが段々わかってきて、お手上げになってしまった。これが陸上イージスの断念に追い込まれた現在の状況です。

Ⅳ　冷戦後の過渡期の２６年間
ー核を持たぬ反米諸国を征伐してきた時期

冷戦後の過渡期の２６年間というのはどういう時代であったか。その前から言いますと、アメリカは3回の総力戦を戦ってきた。

第一次総力戦というのは、１９１０年から１９４５年の時期。ドイツ、日本を打ち破って、イギリスから覇権を禅譲してもらい、パックスアメリカーナを樹立するための総力戦でした。

第二次総力戦というのは、第一次総力戦が終わった４年後の１９４９年からはじまった。いわゆる冷戦。ソ連を封じ込め、解体させた 44 年間ですね。後半の１９７２年以降は中国を味方につけて、ソ連を孤立させていった。これが第二次総力戦です。

そして冷戦後は、核を持たない、弱体の戦力しかもたぬ反米勢力を時々征伐してきたような２６年間でした。ただ、その場合の軍事ドクトリンというのは、核戦争の様式を維持し、それを利用しながら、核兵器を持たない反米勢力にさしむける。こういうやり方をやった。だから簡単に勝てるだろうと、気楽な戦争ができるだろうと考えてきたのです。だから、冷戦の時と戦力の仕組みはほとんど同じなんです。しかし、核と非核、両方とも使える、実質的には非核ミサイルを使い宇宙で全体を統括する。あるいは防衛する。ただし、ロシアや中国の核戦力に対しても今後敵となった危険に備えて核抑止の態勢は維持しておくことにした。こういう３本柱でやってきた時代でした。

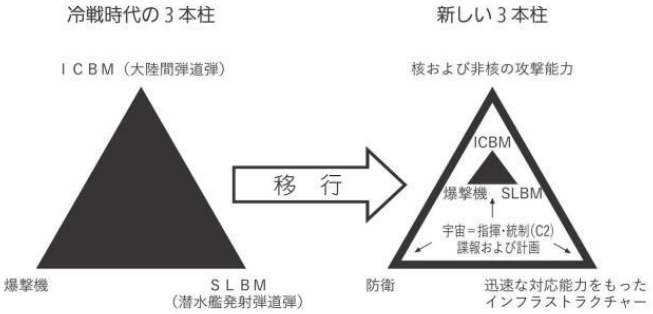
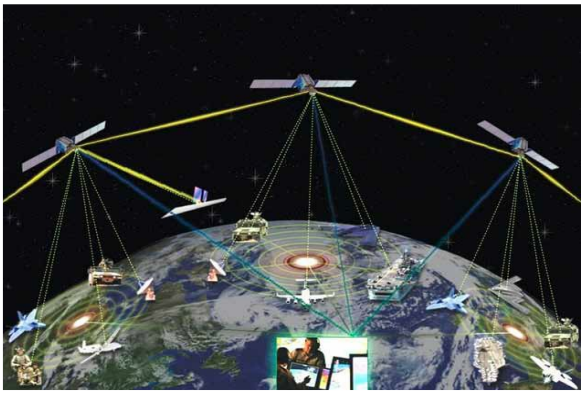


図　核作戦態勢の３本柱（出所『核兵器・核実験モニター』156 号、2002 年 2 月）

・「宇宙ベースのネットワーク中心型戦争を「核をもたぬ敵」にさしむける（湾岸戦争からイラク戦争へ）

ですから、華やかだったのは宇宙ベースのネットワーク中心型戦争でした。その原型は、１９８０年代のＳＤＩ（アメリカ合衆国戦略防衛構想）の、つまりソ連に対する最後の締め上げとなる軍拡を仕掛けて作り出してきたんですけれど、湾岸戦争等々で磨きをかけた

ネットワーク技術を使い、宇宙ベースのネットワーク中心型戦争を、核のない敵にしかけるということを２０数年間やってきたわけです。



・ブッシュのイラク・中東戦争

非核の敵を国連ルールに反して先制攻撃したブッシュのイラク・中東戦争というのはまさしくそういう戦争であります。先制攻撃をやって簡単に勝てるだろうと考えた。当初は１０兆円ぐらいのお金をかければイラクを支配できるだろうと思っていたら、その１００倍ぐらいのお金を使ってもやっぱり支配できなかった。それは誤算だった。つまり、６兆ドルの出費にもかかわらず、戦争は泥沼化したのです。漁夫の利をえて、中国は経済的に躍進しました。

・総力戦の第３段階に乗り出したトランプ（２０１７年～）

イラク・中東戦争で漁夫の利を得たイランが台頭し、ロシアが浮上した。イラクを事実上牛耳っているのはイランです。だから６兆ドルを費やしてもイラクの石油資源、その利権を握っているのはイランとその背後にあるヨーロッパ、ドイツ、それから中国。アメリカは戦争にお金を出したけれども、経済的に全くペイしなかった。だから新しい挑戦国として中国、ロシア、イランを指定して潰すまで総力をあげて戦う、封じ込めるという方向にトランプ政権は転換しました。４２年前には中国を取り込んだのですが、今度はベトナム、インド、北朝鮮を取り込んでやろうとしているわけです。

・背後に米国の最強勢力「軍産複合体」

背後にはアメリカの最強勢力である軍産複合体がいます。トランプ政権最後の国防長官、マーク・エスパーの前歴は、核ミサイルメーカーのレイセオンです。前任者パトリック・シャナハンは、ボーイング社のミサイル防衛担当の副社長から国防副大臣になりました。軍需産業の中でも宇宙、ミサイル関係、ここのところが一番給料がよくて、トランプさんの熱狂的な支持者が多い。

Ⅴ　トランプが一時、朝鮮戦争終結に前向きになったのはなぜ？

２０００年の南北共同宣言をつぶしたのはネオコンのボルトンです。トランプはこのボルトンを政権に招きました。けんか別れしましたけれど。

２００２年の日朝ピョンヤン宣言を潰したのは安倍晋三と拉致議連です。小泉さんが日朝首脳会談をやったんですが、ここで睨みつけているのは、当時官房副長官の安倍晋三です。彼がネオコンと結び付いてピョンヤン宣言を潰しました。

・北朝鮮は、なぜ核・ミサイル開発に走ったのか？

このとき北朝鮮は、「ブッシュ・ネオコン政権によってイラク、リビアは潰された。次は我々の番だろう。核ミサイルで武装しないかぎり次に潰されるのはわが国だ」と考えた。実際にはベトナム・キューバ型の道もあったと思うのですが、何が何でも核を持たなければ潰されると考えたわけです。北朝鮮の核・ミサイル開発の目的は２つあって、軍事攻撃で政権を転覆しないでほしいということと、南北間の話し合いで朝鮮戦争終結するのでアメリカはそれを妨害しないでほしいということでした。

・トランプはなぜ、北の金体制つぶしをやめたのか

それではトランプはなぜ、キム体制潰しをやめたのか。北朝鮮が必死になって核抑止体制を確立したために、簡単にはつぶせなくなったからです。北朝鮮は最新鋭の核ミサイルを持つに至りました。潰そうとすれば「返り血」を浴びることになるでしょう。それと北朝鮮には米帝国の再建に役立つ資源がない。資源のあるリビア、ベネズエラとは全然違うので優先順位が上がらなかった。

それから北朝鮮自身は「ベトナム化」の道に進んでもいいと考えている。だから、あなた方は中国嫌いでしょう。ベトナムと同じような方向に誘導してくれたら中国の力は弱まりますよ。私たちも中国は嫌です。このあたりのことをトランプと金正恩はかなり言い合ったのではないでしょうか。これはうまく使えるかもしれないということになったんだろうと思うんですね。

こうした入れ知恵をしたのは誰か。ヘンリー・キッシンジャーだと思います。３０年前に米中和解を演出し、ソ連を孤立・崩壊に追い込んだ人物です。ソ連の次は中国だ。だから、中国を孤立・崩壊に追い込むためには、ベトナム、北朝鮮を中国から引き離す。こういうことをやったほうがうまくいくのではないか、こういう具合にキッシンジャーが考えて働いた可能性があると思います。

Ⅵ　トランプは、なぜ「米中新冷戦」＝「核ミサイル防衛」に踏み切ったのか

トランプのやろうとしていることは、白人労働者層の支持を固めて再選を勝ち取ることです。この一点だけで考えたら彼の政策の本質がわかってきます。一方ではアフガン・中東の地からは米兵を引き揚げると言っている。その点では軍産複合体の利害に反しています。どういう介入をトランプが嫌がっているかといいますと、支持者の血を流すような介入をしたくない。どんな介入がいいかと

いいますと宇宙から介入するとか、自分たちの支持者たちには人気がある軍需産業にいい仕事が大量に出てくる、こういうものです。

それから、海外の駐留経費を日本、韓国、ドイツから取り立てる。中国に移った仕事を米本土に取り戻す。特に、製造業や宇宙・軍需産業の高給の仕事です。彼の言うのは全て自分の支持者を増やすというところに焦点が当たっています。

（１）中国封じ込め――軍事巻き返し
米国の国家安全保障戦略（２０１７年１２月）

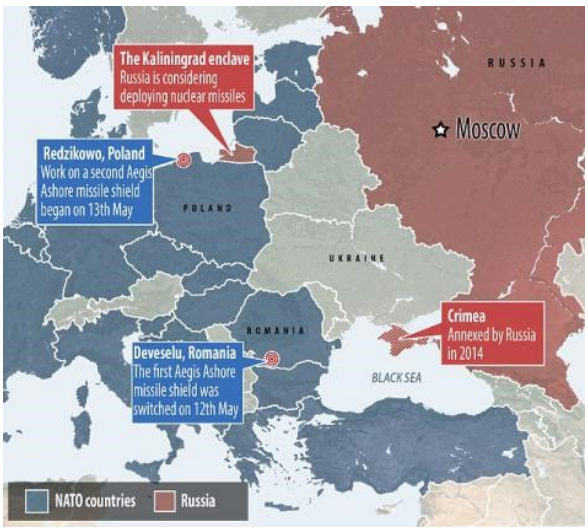
中国を封じ込め，軍事巻き返しを狙って２０１７年に米国の国家安全保障戦略を書き換えた。主敵を非核の「ならずもの国家」から核武装した中国、ロシアの２大「修正主義国」に変えた。それとイランですね。

（２）第二次総力戦でソ連をつぶした
栄光のレーガン期の３大教訓を引き継ぐ

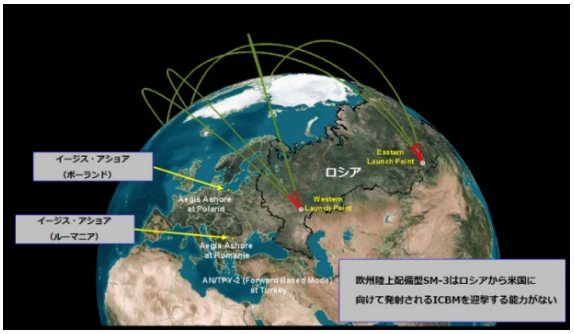
第二次総力戦でソ連を潰したように、敵を潰して一方勝ちするまで第三次総力戦をやる。そのためには核ミサイル防衛をやってまで核戦争を構える。いざとなったら核戦争をやるという瀬戸際までやらないと、中国にいうことをきかすことができないからです。

そこで核ミサイル防衛となります。先にも述べたように、これまでは核ミサイル防衛でなくて、通常型のロケット砲防衛でした。フーシー派とか、ハマース（7）のロケット砲を撃ち落とすというような迎撃システムであった。これを本格的な核ミサイルを撃ち落とすことができるものに転換する。ということは核戦争を覚悟して、核戦争が起こっても勝つという、こういう体制を中国、ロシアに対して追求していくという方向性を強くする。つまり、１９８０年代のレーガンさんと同じです。この強硬路線にまで戻らないと中国を屈服させられないということです。

（３）東欧戦線ではNATO軍事同盟をさらに
東方に広げロシアとイランを封じ込めよ



東欧戦線では、２０１４年にロシアがクリミア半島を併合しましたが、NATO 軍事同盟をさらに東方に広げ、ロシアとイランを封じ込めようとしています。そのため東ヨーロッパの核ミサイル防衛として陸上イージスの配備を進めています。米国は、２０１６年５ 月に陸上イージス基地をルーマニアに造りました。今年（２０２０年）の年末にはポーランドの施設が稼働する予定です。第三番目が日本だったのです。



そうした中で２０１８年、INF 全廃条約（中距離核戦力全廃条約）（8）から米国は脱退しました。中国が中距離核戦力を持っているか

ら、アメリカも中距離での核戦争に備え、必勝態勢を築くということです。

Ⅶ　中ロ側の対抗策
――より安価で効果的な軍拡が加速

（１）「槍」の強化――ロシア

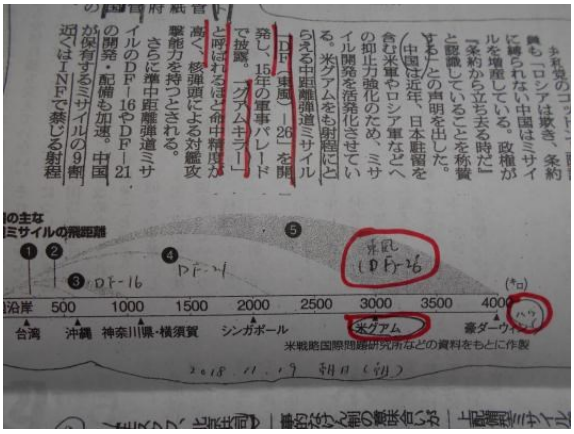
これに対する中露側の対抗策というのは、より安価で効果的な新しい軍事革命＝「槍」の強化です。ロシアが自信を持っているのが極超音速弾頭グライダーの「アヴァンガルド」で（9）、前衛という意味です。

RS-28に搭載されると見られる極超音速弾頭アヴァンガルド

あるいは極超音速 ASM「キンジャル」です。核推進型の超高速巡航ミサイルのプレベニスも開発されています。

・槍の強化 ―― 中国

中国の「槍」の強化では、グアムを射程にとらえる中距離弾道ミサイル東風（ＤＦ）－２６が開発されていて、「グアムキラー」と呼ばれるほど命中度が高いとされています。また、極超音速滑空体（ＨＤＶ）についても開発しています。



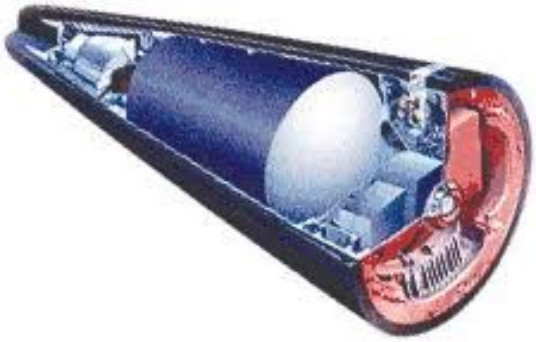
２０１９年に出現したＨＧＶ搭載のＤＦ－１７は平べったい形をしています。グライダーで、大気の力を利用しながら滑空する。だからスピードをあげられるのです。

単なる巡航ミサイルは自らの力だけで動きますからスピードはゆっくり。しかし、超低速で低いところをぐるぐるっといくらでも回ってうねうねといける。それに対してのHDV は超高速で、かつ低空を自由自在にいける。こういう優れものなんです。

山東省の青州にはＤＦ－２６部隊が配置されています。これは日本、韓国を睨んでいる。ミサイルをトレーラーに積んでいてどこでも動けるので発射位置を特定しにくいという特徴があります。

（２）敵の迎撃体が近づいてきたら、
先に核自爆させる装置をつける

さらに敵の迎撃体が近づいてきたら、先に自爆させるための装置を付けることができます。核弾頭のところに近接信管を積んでおきますと、核反応は点火から爆発まで１０万分の１秒で終わってしまうので、迎撃しようと思って迎撃ミサイルが秒速９キロメートルで近づくと、９センチ近づいた時点で核反応が完了してしまうのです。このことも陸上イージスの事情説明で防衛省は全くしていません。



宇宙低層（１００キロ～１０００キロ）で核自爆が起こるとどうなるか。天空から「核の雷撃」が起こります。電磁パルスが発生し、地上の電気回線に深刻な状態が発生して「核の闇」になります。この高度で核爆発が起こったら、GPS、通信、監視システムが麻痺し、（米国の）戦争と経済のシステムの根幹が崩壊することになります。

（３）衛星攻撃能力で
米国に追いすがる中国

衛星攻撃能力で米国に中国はかなり追いすがる状態です。要するに宇宙衛星は米国の戦争システムの最大の弱点で、「裸の王様」の状態で回っております。低いところから、地上１００キロとか１０００キロのところ、さらに対衛星レーザー砲基地とか、電磁パルス実験施設なんかも中国は大規模に作っているのです。

（４）絶好の標的としての原発・核施設

絶好の標的は原発、核施設です。特に日本の原発の場合、憲法９条スペック（仕様）で、軍事攻撃を想定していなかったから、これは簡単に攻撃できます。ゲリラ攻撃を想定したスペックは欧米では標準です。しかし、本格的なミサイル攻撃に耐えられる原子力発電所は世界にはありません。

（５）中ロ側のもう一つの対抗策
――宇宙高層を回る「裸の王様」を狙え

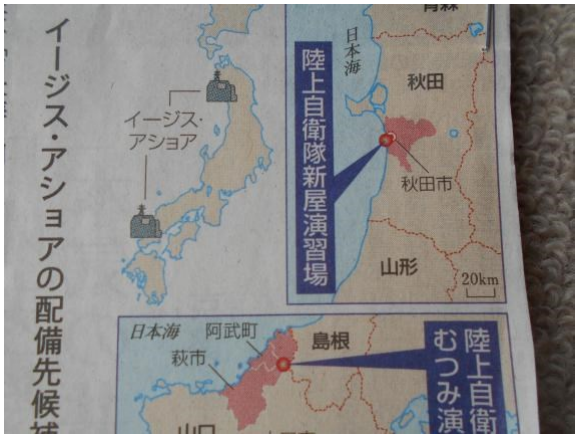
中ロ側には地上２万キロ、３万キロで爆発させる構想があります。２万キロ上空ではGPS 衛星が無防備な「裸の王様」のままで回っています。3.6万キロ上空の静止軌道でも、数百機ほどの静止衛星が回っています。これを攻撃するのは難しいですけれども、やろうと思えばできます。

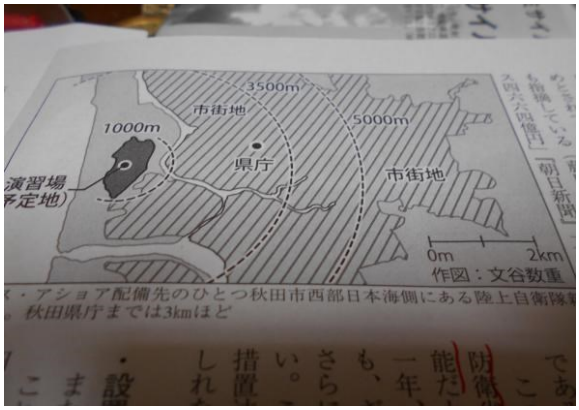
Ⅷ「陸上イージス」中止の意味

陸上イージス設置は、北朝鮮の通常ミサイルの迎撃用だと、ずっと説明されてきました。しかし・・・

（１）あまりに市街地に近く、危険
秋田市西側の陸自新屋演習場
・・・県庁から３キロ

陸上イージスが配備される予定だった秋田市西側の陸自新屋演習場は県庁から３キロのところにあり、あまりに近い。確かに危険なんです。





私も秋田で講演させていただきました。やっぱり住民の多数が反対していました。また、防衛省の誤算の根源は、山口県のむつみ演習場では、ブースターが住民の住んでいるところまで落ちてくる可能性が排除できないということとされています。でもそれは口実だと思います。なぜかというと、辺野古のことを見ても、住民がどう思おうとペンタゴンから言われたら防衛省はやらざるを得ないのです。だから、余程のことが起こったはずです。

（２）変わるアメリカ議会の対応

そのことを示す観測記事を紹介します。今年（2020 年）の２月１４日付け米国議会報告書をめぐる記事ですが、これまでの米国は、ロシア、中国の戦略核ミサイルを迎撃するという目標も能力もなかった。現在も基本的にはありません。それをやろうとしたのは３０年前のSDI の時で、それから３０年間そういう研究はしていません。自分たちが持っているのは対ゲリラ戦の技術であって、何百もの洗練されたロシアの核ミサイル上昇段階後に核ミサイルが放つ核弾頭再突入体を迎撃するために必要な技術的洗練と絶対的な数というのは両方欠けている。そのことをそのまま認めているんです。

（３）能力不足
・・・週刊誌にすっぱ抜かれる

また、防衛省の役人が、２０１９年３月にロッキードマーチン社の工場に、特にイージスシステムの大元である SDYー７レーダーがどういう水準のレーダーであるか確かめに行きました。そしたらこれには迎撃ミサイルを誘導して敵の核弾頭再突入体に直撃させる「射撃管制能力」が欠けていることがわかってびっくりしたというのです。通常弾頭やロケット砲弾を阻止する非核ミサイル防衛であれば、迎撃弾に近接信管を付けておけば、数十メートル近くで爆発させれば阻止できます。高射砲と同じです。しかし、核弾頭再突入体は硬くて、直撃させないと阻止できない。近接信管の利用が不可欠なレベルの防空能力はあっても、「核弾道ミサイル防衛」のシステムとしての能力に不足がある。ところが防衛省は、その後の２０１９年１０月末にこのレーダーの購入契約を結んだのです。誰がこのような「問題のある商品」を選定したのか？

これについて防衛省の役人の報告書を週刊文春がごく最近すっぱ抜きました（２０２０年７月）。これも防衛大臣の判断にかなり影響しているのではないかと思います。

（４）ブースターの落下問題は口実
ロシア・中国の最新の核攻撃能力
に対応できない

元防衛官僚の柳澤協二さんが講演で述べていることですが、「（イージスアショアを止めた理由を）ブースターを演習場内に落下させることができなかった。お金かかるから止めたんだと言っているけれども、そんなことは嘘だ」と。彼が言っているのは、陸上イージスの能力では北朝鮮やロシアが開発している低空を飛び速度・高度を自在に変えられる高速滑空弾あるいは核弾頭再突入体の直撃破壊に対応できないということがわかってきたからだ。要するにブースターが演習場の外に落ちるなんていうのは、口実に使っただけで、本当の理由はそこにあるのだという。彼の観測でありますけれど、私の考えてきたことと基本的に同じでありました。

（４）秋田市の市民集会で
私が強調したこと

秋田市民集会で私が強調したことは、単なる非核ロケット砲弾の迎撃ではない。核ミサイル防衛だ、米国に向かう核ミサイルを撃破するのだということです。非核の通常ミサイルの阻止・撃墜を目標とするならば、若干は役に立つかも知れない。しかし、最新式の核ミサイル（再突入体）の撃墜・阻止こそが、実際の目的・使命となってきた。この課題を果たせるかという点で評価すると、陸上イージスは、無益であり、日本を核惨事に導く、有害極まりない代物だと主張しました。このことをわかってもらったことは運動の前進に役に立ったと思っています。

・敵ミサイルを発射前（発射直後）に
破壊せよ

そして、今、こうなると敵基地への先制攻撃しかないということになってしまっているわけです。途中でなかなか迎撃することはできないとなってくるとね。だから、発射の前に破壊しようと。これを言ってきた人はいるんですよ。エドワード・ルトワックさんでありまして、『日本 4.0』というこの本の中でアメリカの立場から、日本は国家戦略で先制攻撃能力の構築が必要である。核ミサイル攻撃をやろうとすると途中で撃ち落とすなんてことは無理である。日本がやるべきことは、敵基地先制攻撃である。これを日本は勇気をふるってやろうというところまで踏み切れば日本は一人前であると、煽っている本なんです。

Ⅸ　自衛隊に「宇宙作戦隊」を
作った意味

そこで敵基地の上空で電磁波兵器を用いて、発射前、あるいはブースト段階（加速・上昇段階）で敵のミサイルを無力化させる構想が出てきます。そういう中で航空自衛隊の宇宙作戦隊を作った意味があるんです。宇宙作戦隊の任務は「デブリの監視」と言っていますが、それは付随的なことです。本来、デブリの監視であれば、スペースガード協会とか、民間団体、公益団体がやればいい。なぜ自衛隊がやらなければいけないのか？　そうではなく、アメリカの宇宙飛行体・宇宙インフラを敵の攻撃から防衛するということと、敵のミサイル基地の上空に多数の宇宙飛行体をアメリカが配置して先制攻撃をするということ、その活動を支援する、その役割を自衛隊にやれと言っているのです。

X（宇宙）核戦争に勝者はあるのか？「改憲日本」の末路

宇宙核戦争に勝者はいるのか？　もしこのまま日本が９条改憲に突き進んだ場合、「改憲日本」のありそうなシナリオとして見えてくるのは、アメリカとロシア、中国がお互いに「負けないぞ」という感じで、ぎりぎりまでチキンレースをやる状況です。そうすると、お互い見誤って、どこかで限定的な核交戦が日本の上空で始まることになるでしょう。これは全面的な交戦でなくて起こり得ます。「核の闇」が日本列島を襲い、電源喪失から原発爆発に至る。日本のあまりの惨状に正気を取り戻したアメリカと中国、ロシアは核停戦に応じる。だから犠牲となるのは日本だけでありまして、日本は無人の地になり、避難民は仲の悪い朝鮮半島、中国の方に逃げていかざるを得ない。やはり風上の方に逃げないとダメなので、今から我々は友人を朝鮮、中国の奥地あたりに探しておいたほうがいいと思います。

XI　とは言っても、中国、ロシア、北朝鮮、韓国を信用できるか

中露の動きというのは、特に中国は覇権をめざす動きが強いですけれど、やっぱり強い国、アメリカは先に義務を負うべしということで、次の選挙でトランプを落選させる。これしかないと思います。米国と中国の覇権争いを克服する道というのは、核戦争に勝者はいないということを、中国も含めてしっかりと肝に銘じさせる必要がある。

それをやるためには中小国と市民社会の連携が必要です。中小国連合と市民社会が連携して両方の覇権主義を批判する。冷戦の時代には、一部の革新勢力が「アメリカは敵だけれども、ソ連とか中国は味方である」と言っていました。当時、両方ともダメだということはなかなか言えなかった。これはその時代の限界だったんですけれど、今は言えます。米国、中露の覇権争いを批判する。それと同時に明治期以降の日本帝国主義の誤りを中国やロシアは繰り返してくれるなという忠告もするということです。

それと７０年間続いた朝鮮戦争を終わらせるということであります。今、朝鮮半島では第一次世界大戦末期に両軍兵士たちが交歓し、互いに殺し合わないように誓いあった状況が再現しつつあります。軍隊同士で戦うのをやめにする状況に酷似しています。そのような中で「北の崩壊まで戦え」と韓国軍に「督戦のムチ」をふるうのは、安倍政権だけになってきた。百年前の場合、「督戦のムチ」をふるう国王らの権力者に前線兵士たちは反抗し、銃を逆に向けて王政を打倒してしまいました。今、よく似た状況になりつつあります。

XII　「希望の惑星２０３０」に向けて――「共通の安全保障」プラス「人間の安全保障」

最後は「希望の惑星２０３０」に向かって、「共通の安全保障」、「人間の安全保障」という形で、次に掲げる４大テーマの解決に向けて、世界の市民社会、国連で深く合意して、アメリカ、ロシア、中国も巻き込んでいく。そうしないと覇権の動きはなかなか止められないですね。

第一の課題は、宇宙核戦争の阻止、核廃絶、浮いた資源を他の３つの課題へ回すことです。

第二は気候危機の阻止。

第三が貧富の格差の是正。

そして、第四に、コロナ禍に負けない、　免疫力の高い自然人と地域経済を創ることであります。

（１）日本国憲法９条を宇宙に広げる

そして、日本国憲法９条を宇宙にひろげることであります。つまり、海外で戦争のできる国というのは、実際には宇宙で戦争ができる国に日本を変えるということです。これに対して９条を宇宙にも広げていく。

それから核の先制使用の禁止、戦略核制限条約を守るということ。特にアメリカの政権にはそのように政策転換させることです。

そして、人工衛星への攻撃を禁止し、宇宙衛星から地上、他の宇宙資産への攻撃行動をやめさせよ。つまり、宇宙戦争禁止条約の制定、条約化も必要でしょう。

北東アジアについては非核兵器地帯、INF（中距離核兵器）配備を禁止する。戦争するならば、我々を巻き込まずに中国とアメリカとで撃ち合い共倒れしてください。我々を巻き添えにするなという運動も必要かもしれません。１９８０年代のヨーロッパでは「宇宙核の凍結、陸上配備の INF ミサイル禁止」を求める運動が盛り上がり、その結果、核軍拡競争の停止・凍結の終結。一方の当事国＝ソ連の崩壊にまで至りました。４０年後の今日、同質の運動を展開し、今度こそ核軍拡・核抑止に固執するならば、すべての当事国の体制変革に至る質の運動が必要なのではないでしょうか。

（２）自衛隊を改革し、
自衛隊員の命を守っていくために

自衛隊を改革し、自衛隊員の命と人権を守る。米国からの軍事戦略からの自立をはかる。文民統制を強め、最終的には「国際防災隊」に改組していくことですね。

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を読みながら「平和な宇宙」づくりを考えていきたいと思います。

注１　SDI：１９８０年代の米国の戦略防衛構想。別名スターウォーズ計画

注２：世界終末時計：核戦争などによる絶滅（終末）を『午前０時』になぞらえ、その終末までの残りの時間を「０時まであと何分（秒）」という形で象徴的に示す時計である。（Wikipedia より）

注３：電磁パルス攻撃：元陸上自衛隊化学学校長の鬼塚隆志氏によると「高高度」と言われる地上３０キロから４００キロで核爆弾を爆発させ発生するガンマ線（γ線）を利用して、安全保障や社会インフラに影響を与えようというものです。放射線の１つであるガンマ線（γ線）は空気中の分子と衝突することで電子を発生させ、最終的に強烈な電磁波となって地上に押し寄せます。電磁波は、人体に直接の影響を与えないものの、電力や通信に障害を生じさせます。その範囲は広く、例えば、東京上空３０キロで、広島に落とされた原爆の３分の２程度の核爆弾を爆発させると、範囲は半径およそ６００キロに及び、ほぼ本州の全域で停電が発生すると鬼塚氏は指摘します。復旧には数か月から数年かかり、その間、交通機関はマヒし、流通も遮断され、食糧などの物資は入ってこなくなります。水も出なくなり、医療機器も動かず、命に係わる事態も発生します。コンピューターは制御できなくなり、飛行機が墜落したり、化学工場が爆発したりする危険性もあるといいます。さらに鬼塚氏が懸念するのが原子力発電所への影響です。福島第一原発の事故は電源を喪失し事態の悪化を招きましたが、それと同じ現象が起こる恐れもあるというのです。（NHK 政治マガジンより）

注４　ビーム：粒子の集団や、粒子のように振る舞う波長の短い波が、細い流れとなって並進し、互いにはほとんど衝突しないものである。粒子や波の名前や種類を冠し「～ビーム」という。（Wikipedia より）

注５：フーシー：フーシまたはフシこと、アンサール・アッラー、（日本語で「神の支持者」を意味する）は、イエメン北部サアダ県から発展し、北部を拠点に活動するイスラム教シーア派の一派ザイド派の武装組織である。（Wikipedia より）

注６：ロケット砲：ロケット弾の発射に特化した大砲の総称のことであり、ロケットランチャーの一種である。複数の発射器を持つものは多連装ロケット砲と呼称される。この兵器で使用される弾丸（発射物）はロケット弾と呼ばれ、推力を持ち、自力で飛翔する能力をもつ（Wikipedia より）

注７：ハマース：ハマースあるいはハマース運動は、イスラム主義を掲げるパレスチナの政党。１９８７年１２月１４日にアフマド・ヤーシーンによってムスリム同胞団のパレスチナ支部を母体として創設された。（Wikipedia より）

注８：INF 全廃条約：中距離核戦力全廃条約は、アメリカ合衆国とソビエト連邦との間に結ばれた軍縮条約の一つで、中距離核戦力として定義された陸上配備の中射程の弾道ミサイル、巡航ミサイルをすべて廃棄することを目的としている。１９８８年６月１日発効。アメリカは２０１９年２月１日に本条約の破棄をソ連の継承であるロシア連邦に通告したことを明らかにしており、これを受けてロシア連邦も条約義務履行の停止を宣言した。破棄通告から６カ月後の８月２日に失効した。

注９：アヴァンガルド：ロシアが開発した極超音速滑空体であり、通常弾頭または核弾頭の搭載が可能である。２０１８年３月１日ロシア連邦大統領ウラジーミル・プーチンが年次教書演説の中で発表した６つの新型戦略兵器の１つである。（Wikipedia より）